

説教 『復活の芽吹きを「聞く」』山本 護 牧師
聖書 イザヤ書 55：10～11／ルカによる福音書 24：13～27

大祭司や律法学者らの前にイエスが復活の姿で現れ、彼らを屈服させたら痛快なのに。とはいっても「もし、モーセと預言者に耳を傾けないなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう(ルカ 16:31)」。律法や預言を「聞く」ことより「語ろう」とする者は、復活の真実には出会えまい。彼らが固く握りしめているものは、「神に聞く」御言葉ではなく、「自分が聞きたい」それなのだ。この「握力」は、敬虔さと隣り合っていないながら、まったく違うものだ。

二人の弟子は、女たちから「復活の報告」を聞いていても(24:22~24)、「十字架の死」から逃れるように帰郷した(24:13)。その途上「それとは分からぬイエス」から尋ねられて絶句する(24:17)。そして悪夢のような事件を説明し、「わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました(24:21a)」と落胆を吐露した。「しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります(24:21b)」。「しかも～」とはどういう意味か。「メシアに働いていたはずの神が何ものなさらずに放置している」という神への幻滅ではないのか。弟子らは女たちの報告に驚きはしたものの(24:22)結局、使徒と同じく「たわ言(24:11)」だと片づけた。そんな彼らには、復活したイエスが傍らにいたとしても(24:15)分からない。こうした信仰者の無明は、「目は遮られていて(24:16)」と表現される。

人間の感覚器官は視覚が優勢だが、十字架の死という闇においてはまったく機能しない。だが女たちは暗闇へ赴き(24:1)、天使から「なぜ、生きておられる方を死者の中に探すのか(24:5)」と語りかけられた。視覚ではなく、聴覚によって「復活の言葉(24:6~7)」が芽吹いたのだ(24:8)。ところが弟子の場合は十字架に背をむけ一刻も早く明るい所へ行きたかった。視覚に頼っていても「復活の言葉」は芽吹かない。彼らにも「イエスは生きておられる(24:23)」という復活の種は蒔かれてはいる。だが「物分りが悪く心が鈍い(24:25)」ゆえ芽吹かせるために少々手間がかかる。信仰の「握力」に頼る者は、「近づいて一緒に歩いて(24:15)」いただき、頑なさを解きほぐしてもらう必要がある(24:26~27)。

復活の種はすでに、私たちの内に蒔かれている。「雨も雪も、ひとたび天から降れば、むなしく天に戻ることはない。それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせる(イザヤ 55:10)」。私たちの種は神からの雨を待つばかりだ。「そのように、わたしの口から出るわたしの言葉もむなしくは、わたしのもとに戻らない(55:11a)」。イザヤの預言はまさに復活されたキリストを語っている(ルカ 24:27)。復活の種は、この小さな教会にも蒔かれており、「わたし(神)の望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす(イザヤ 55:11b)」。その働き、私たちにとっては「種蒔く人にとっては種を与え、食べる人には糧を与える(55:10b)」こととなる。そして復活の真実は、芽吹いた後に必ず「生い茂る(55:10)」。

弟子がキリストに出会うためにはもうひと手間必要だった(24:30~31)。死から転換する復活の種は、「イエスは生きておられる(24:23)」という御言葉を「聞く」ことで芽吹く。御告げであれ女たちの伝言であれ、ヘブライ語であれ日本語であれ、「聞く」ことで、新しい生命、復活が私たちのものとなる。



【おまけのひとつ】

春 早々に萌え出る草があり じっくり ぼつぼつと開く新芽がある 復活もこのように一人ひとりの形でそれぞれであっても キリストが約束されたように 野全体に 新しい生命が溢れ出る